

## 13. 薬学部

I	薬学部の教育目的と特徴	13-2
II	分析項目ごとの水準の判断	13-3
	分析項目 I 教育の実施体制	13-3
	分析項目 II 教育内容	13-10
	分析項目 III 教育方法	13-21
	分析項目 IV 学業の成果	13-22
	分析項目 V 進路・就職の状況	13-25
III	質の向上度の判断	13-27

## I 薬学部の教育目的と特徴

### 1. 薬学部の理念と目標

薬学は、人体に働きその機能を調節して疾病の治癒や健康の増進をもたらす医薬品の創製・生産と適正使用を目標とする総合科学である。すなわち、生命と物質（医薬品）のインターフェイス構築を介して創薬と最適化された薬物治療を実践し、人類社会に貢献する。薬学を修めた者には薬剤師国家試験の受験資格が与えられる。したがって、薬学部には医療において重要な役割を担う薬剤師の育成が社会から付託されている。

京都大学薬学部は、生命倫理を遵守しながら創薬研究を志向する学生と、専門的知識・技能を有する薬剤師の育成を目指している。すなわち、基礎科学（有機化学、物理化学、生物化学等）と薬学固有の科学（薬理学、薬剤学、衛生化学、臨床薬学、職業倫理等）の知識と技術の教育による薬学への知的好奇心や研究志向の養成と、薬剤師・医療人に求められる能力・資質の涵養を目指している。このように、本薬学部は諸学問領域の統合と演繹を通じて世界に例を見ない創造的な薬学の“創”と“療”的拠点を構築し、人類と社会の発展に貢献することを理念・目標としている。

### 2. 薬学部教育の目的と特徴

本薬学部は、医薬品の創製と生産を推進する研究者と技術者の育成、及び医薬品の適正使用と管理を担う薬剤師の養成が使命であるが、生命及び健康の保全に直接に関与する医薬品を対象にするため基礎科学とその実践的対応の教育は不可分の関係にある。本学部は前身である医学部薬学科時代より、数度の教育内容の改革と教育実施体制の改組をしてきた。平成18年度からは創薬科学研究者教育の一層の充実を目的とした4年制の薬学科と実践的な薬剤師の養成を目標とした6年制の薬学科の2学科の新体制に移行した。これにより、基礎科学と応用的実践的学問の総合と融合を図りながら、医薬品の創製・生産を担う独創的な薬学研究者・技術者と、医薬品の高度な適用・管理を担う指導的薬剤師の養成を強化し、よりよく社会に貢献する。この新体制は本薬学部がこれまで掲げてきた学部教育の理念、目標をより一層明確化したものである。本薬学部は、この移行の理念と目標を尊重し、国内外でこれを主導し、新しい薬学教育・研究像の確立に挑戦する。また、理念、目標の実現に向け、教育・研究システムの柔構造化、グローバル化、社会的連携の強化を目指した制度改革に継続的に取り組む。

#### [想定する関係者とその期待]

- 1 ) 受験生と学生：最先端の創薬科学と医療薬学の研究を遂行できる研究教育システムの提供
- 2 ) 製薬企業・その他産業界：革新的な医薬品の創製と生産を推進できる創薬研究者の養成
- 3 ) 医療関係者：高度な先端医療に対応できる医療薬学研究者の育成
- 4 ) 省庁・地方行政機関：新薬の審査業務に携わる人材の輩出
- 5 ) 大学関係者：薬学専門教育が出来る人材の育成

## II 分析項目ごとの水準の判断

### 分析項目 I 教育の実施体制

#### (1) 観点ごとの分析

##### 観点 基本的組織の編成

(観点に係る状況)

###### ① 学部の内部構成および学生定員と現員

昭和 35 年の薬学部創設以来、薬学科と製薬化学科の 2 学科制をとってきたが、平成 9 年にこれら 2 学科は総合薬学科として統合改組された。更に平成 18 年度には、生命科学・創薬科学研究者教育の一層の充実を目的とした 4 年制の薬科学科に加えて、実践的な薬剤師の養成を目標として 6 年制の薬学科が新設され、現在に至っている。また、同年度に統合薬学フロンティア教育センターが新設され、学部教育を支援している。図 1 に、現在の組織図を示す。

以下に平成 13 年度以降の学部の入学定員と充足状況（表 1）および学部収容定員と充足状況（表 2）を示す。入学定員に関しては充足率 100.0%～114.0%、学部収容定員に関しては充足率 109.7%～114.7% の範囲で推移しており、6 年制が始まった平成 18 年度以降も同様の状況である。

表1 学部入学定員の充足状況等(京都大学大学院薬学研究科・薬学部の現状と課題 自己点検・評価報告書(平成18年1月)より)

区分		定員	募集人員	志願者	第一段階選抜合格者数	受験者	合格者	入学者	割合
平成19年	薬科学科	50	50	(32) 113	113	109	55	(15) 55 [1][1]	110.0%
	薬学科	30	30	(56) 110	110	108	31	(13) 31	103.3%
平成18年	薬科学科	50	50	(42) 188	187	144	57	(11) 57 [1]	114.0%
	薬学科	30	30	(52) 127	127	108	30	(13) 30	100.0%
平成17年度		80	80	(129) 373	373	308	85	(27) 85 [1]	106.3%
平成16年度		80	80	(133) 391	389	339	84	(30) 84 [2]	105.0%
平成15年度		80	80	(179) 508	508	438	81	(26) 81 [3]	101.3%
平成14年度		80	80	(190) 471	471	394	85	(35) 85 [2]	106.3%
平成13年度		80	80	(131) 363	363	294	81	(29) 80 [1]	100.0%

備考 ( )内は女子で内数、[]私費留学生内数、[]国費留学生内数

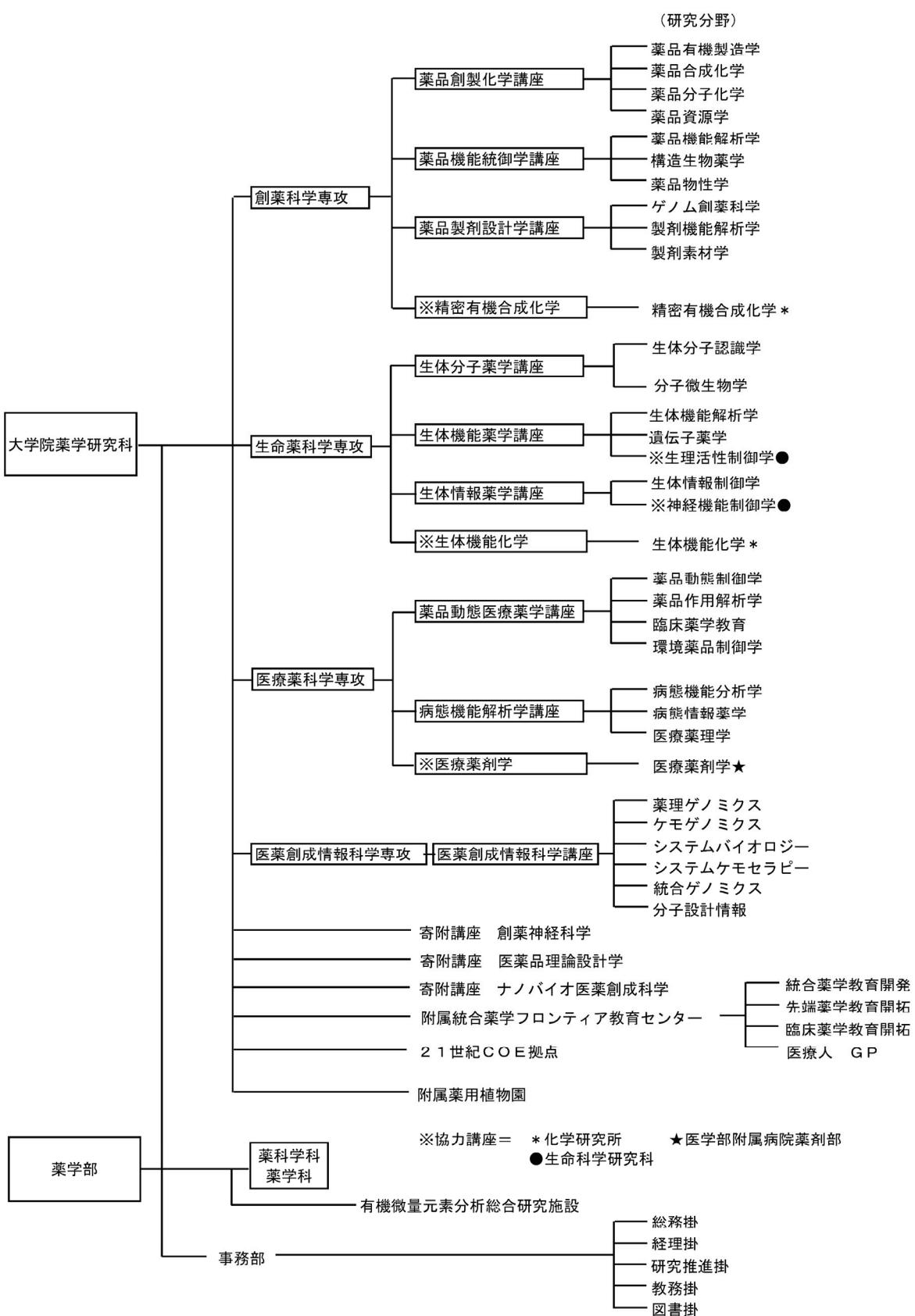
表2 学部収容定員の充足状況等(平成19年度学生便覧・シラバスより)

(各年度5月1日現在)

	収容定員	在学者数	割合	修業年限超過在籍数
平成19年度	320	361 (114)	112.8%	8 (2)
平成18年度	320	367 (120)	114.7%	15 (7)
平成17年度	320	363 (129)	113.4%	12 (5)
平成16年度	320	356 (130)	111.3%	11 (2)
平成15年度	320	351 (127)	109.7%	12 (3)
平成14年度	320	353 (137)	110.3%	16 (4)
平成13年度	320	351 (130)	109.7%	16 (3)

( )内の数は女子で内数

図1 組織図 (京都大学大学院薬学研究科・薬学部の現状と課題 自己点検・評価報告書(平成18年1月)より)



## ② 教員組織の構成と専任教員の配置

平成 10 年度以降の教員定員と充足状況を表 3 に示す。

常勤教員は、平成 8 年までは、薬学部薬学科、製薬化学科、薬学研究科薬品作用制御システム専攻と附属薬用植物園、質量分析室に配置されていたが、平成 9 年度には、大学院重点化に伴う組織改革によって、薬学研究科の創薬科学専攻、生命薬科学専攻、医療薬科学専攻の 3 専攻に配置となった。その後、平成 11 年度には、京都大学に生命科学研究科が発足し、薬学関連分野（生体システム学、システム機能学）新設のために定員 4 名を移管した。そのため、定員数が 54 名から 50 名となった。また、平成 14 年度の定員増加は、旧教養部からの振り替えによるものである。平成 17 年度には、1 名の定員削減のため 51 名となった。平成 19 年度の定員増加は、大学院に新専攻の医薬創成情報科学専攻の新設に伴うものである。

平成 19 年 11 月 1 日現在の現員総数は 52 名（表 4）、その内訳は教授 18 名、准教授 18 名、講師 2 名、助教 14 名である。このうち女性教員は 4 名（准教授 2 名、講師 1 名、助教 1 名）である。近年の創薬研究の急速な進展に伴い、ゲノム科学、構造生物学、情報科学等これまで薬学にはなかった領域の教育研究体制の整備が求められている。こうした状況を踏まえ、本研究科においても他領域から教員を積極的に採用した。その結果、常勤教員のうち本学薬学研究科出身者の割合は、平成 7 年 3 月は 87%、平成 14 年 5 月は 73%、平成 17 年 10 月は 67%、平成 19 年 11 月は 54% に減少した（表 4）。

**表3 教員定員の充足状況**

（京都大学大学院薬学研究科・薬学部の現状と課題 自己点検・評価報告書（平成 18 年 1 月）より）

（各年度末現在）

職名 区分	平成 10 年 度					平成 11 年 度					平成 12 年 度				
	教 授	助 教 授	講 師	助 手	計	教 授	助 教 授	講 师	助 手	計	教 授	助 教 授	講 师	助 手	計
定 員	19	22	人	13	54	18	20	人	12	50	18	20	人	12	50
現 員	17	20	2	15	54	15	16	1	15	47	16	15	2	14	47
現 員															
創薬科学専攻	7	8	2	5	22	6	7	1	6	20	7	6	2	5	20
生命薬科学専攻	6	6		6	18	5	4		5	14	5	4		5	14
医療薬科学専攻	4	6		3	13	4	5		3	12	4	5		3	12
附属薬用植物園															
質量分析室				1	1				1	1				1	1

(表3 続き)

職名 区分	平成13年 度					平成14年 度					平成15年 度				
	教 授	助教 授	講 師	助 手	計	教 授	助教 授	講 師	助 手	計	教 授	助教 授	講 師	助 手	計
定 員	人 18	人 20	人 12	人 50	人 18	人 20	人 1	人 13	人 52	人 18	人 20	人 1	人 13	人 52	人 52
現 員	人 16	人 14	人 3	人 15	人 48	人 16	人 15	人 4	人 13	人 48	人 17	人 17	人 4	人 13	人 51
現 員															
創薬科学専攻	7	6	2	6	21	7	5	3	5	20	8	7	3	4	22
生命薬科学専 攻	5	4	1	5	15	5	4	1	4	14	5	4	1	5	15
医療薬科学専 攻	4	4		3	11	4	6		3	13	4	6		3	13
附属薬用植物 園															
質量分析室				1	1				1	1				1	1

職名 区分	平成16年 度					平成17年 度					平成18年 度				
	教 授	助教 授	講 師	助 手	計	教 授	助教 授	講 師	助 手	計	教 授	助教 授	講 師	助 手	計
定 員	人 18	人 20	人 1	人 13	人 52	人 18	人 20	人 1	人 12	人 51	人 18	人 20	人 1	人 12	人 51
現 員	人 17	人 17	人 4	人 13	人 51	人 17	人 18	人 2	人 14	人 51	人 16	人 17	人 2	人 14	人 49
現 員															
創薬科学専攻	8	8	3	4	23	8	9	1	6	24	8	8	1	6	23
生命薬科学専 攻	5	4	1	5	15	5	4	1	4	14	4	3	1	4	12
医療薬科学専 攻	4	5		3	12	4	5		3	12	4	6		3	13
附属薬用植物 園															
質量分析室				1	1				1	1				1	1

(表3 続き)

職名 区分	平成19年 度					平成20年 度					平成21年 度				
	教 授	准教 授	講 師	助 教	計	教 授	准教 授	講 師	助 教	計	教 授	准教 授	講 師	助 教	計
定 員	人 21	人 22	人 1	人 11	人 55	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
現 員	人 18	人 18	人 2	人 12	人 50										
現 員															
創薬科学専攻	5	7	1	4	16										
生命薬科学専攻	4	4	1	4	13										
医療薬科学専攻	4	5		2	11										
医薬創成情報科学専攻	5	2	1	1	9										
附属薬用植物園															
質量分析室				1	1										

表4 教員の出身研究科

(京都大学大学院薬学研究科・薬学部の現状と課題 自己点検・評価報告書 (平成18年1月)より)

(平成19年11月1日現在)

区分	現 員	京大薬学研究科	その他	その他の内訳
教 授	人 18	人 9	人 9	京都市立医大1、慶應大理工1、京大農2、大阪市立大理1、京大医2、阪大薬2、北大医1、東大薬2、京大工1、岐阜薬科大1、東大理3、阪大理1、千葉大医1、京大生命2、京都薬科大1、筑波大生物1、東工大理工1
准教授	18	10	8	
講 師	2	1	1	
助 教	14	8	6	
計	52	28 (54%)	24 (46%)	

### ③ 学内・学外兼務教員数

本学では教育や研究遂行の上で、必要とする常勤教職員が充足されているとはいえない。それを補うために、これまで非常に勤講師を任用してこれに対応してきた。非常に勤講師の数は年々増加して、平成 15 年度には 203 名（学内より 97 名、学外より 106 名）に上った（表 5）。しかし、翌年の 16 年度には 92 名（学内 44 名、学外 48 名）と激減し、17 年度も 82 名（学内 38 名、学外 44 名）である。18 年度は 91 名（学内 41 名、学外 50）、19 年度は 104 名（学内 48 名、学外 56）と微増したが依然少ない状況である。このことは、常勤教職員に対する教育負担増となっており、今後の課題と考えられる。

表5 非常勤講師在籍者数

(京都大学大学院薬学研究科・薬学部の現状と課題 自己点検・評価報告書（平成 18 年 1 月）より)

区分 年度	学部		大学院		計	
	学内	学外	学内	学外	学内	学外
平成 11 年度	人 18	人 5	18	42	36	47
平成 12 年度	25	13	15	48	40	61
平成 13 年度	26	10	15	46	41	56
平成 14 年度	25	10	14	49	39	59
平成 15 年度	58	14	39	92	97	106
平成 16 年度	26	8	18	40	44	48
平成 17 年度	23	7	15	37	38	44
平成 18 年度	29	7	12	43	41	50
平成 19 年度	33	11	15	45	48	56

### 観点 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

(観点に係る状況) 薬学の教育・研究は、一層の高度先端化、国際化また多面的な社会的要請に呼応する必要がある。これには各専門分野の高度化のみならず各教員の学生に対する教育・指導法の改良、開発も重要である。本学部・研究科教員は京都大学教育改善連続シンポジウムに継続的に参加するとともに、Faculty Development Program にも、京都大学高等教育研究開発推進センターの授業参観プロジェクトに平成 12 年の開設以来 14 名が参加した。また、薬学教育協議会・日本薬学会・日本薬剤師研修センター共催の薬学教育ワークショップには、教授、准教授、助教がタスクフォース指導員（チーフタスクフォースを含む）としてワークショップ運営を主導すると共に、講師以上のほぼ全ての教員が研修受講生として参加するなど、教育指導法の改善に積極的に取組んでいる。平成 17 年度以降の本ワークショップへの参加状況を表 6 に示す。

平成 15 年度からはアンケート方式による学生からの授業評価も行い、授業の改善に役立てている。さらに、平成 18 年に発足した京都大学 FD 研究検討委員会の活動に積極的に参加し、本委員会主催の「授業評価ワークショップ」でアンケートの内容とその結果の中間評価を公開するなど、教育方法の改善に取り組んでいる。図 2 には、学生からの授業評価の例として、平成 18 年度の学部学生（2-4 回生）に「授業改善」に関して意見聴取を行った結果を示した。教員が工夫していると感じているかどうかについては意見が分かれているが、授業が面白いと感じたり学生による評価の重要性を感じている学生の割合が多い。平成 19 年度もデータを集積し、数年分の結果を分析中である。

表 6 薬学教育ワークショップへの参加状況

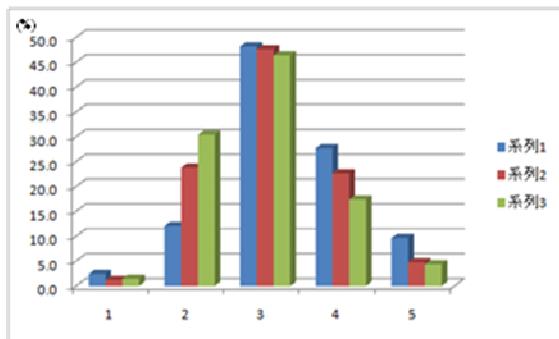
タスク フォース 参加者	平成17年度		平成18年度		平成19年度	
	回		回		回	
	教 授	9	教 授	12	教 授	7
	助 教 授	4	助 教 授	9	准 教 授	10
			助 手	3	助 教	2
	(内チーフタスクフォース 教授 1)		(内チーフタスクフォース 教授 2)		(内チーフタスクフォース 教授 1, 准教授 1)	
受講 参加者	教 授	1	教 授	1	教 授	1
	助 教 授	1	助 教 授	3	准 教 授	3
			講 師	1	助 教	1
			助 手	2		

(延べ回数)

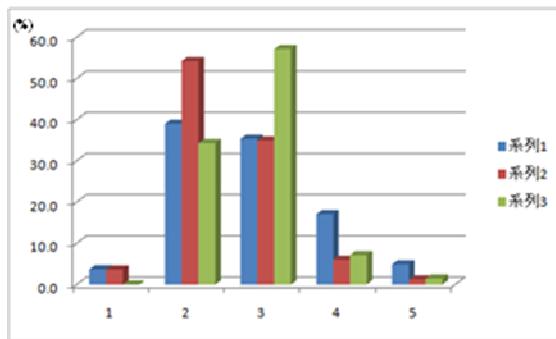
図2. 学部学生アンケート結果その1 (平成17~19年度 学生授業評価アンケート調査より)

授業改善

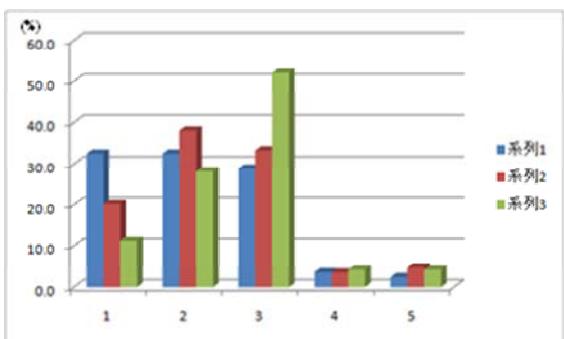
1. 大学の教員の教え方はわかるように工夫されている



2. 大学の授業内容や、教材は面白い



3. 学生による授業評価は授業改善に必要だとと思う



系列1：2回生 系列2：3回生 系列3：4回生

- ①とてもある
- ②ときどきある
- ③どちらともいえない
- ④ほとんどない
- ⑤全然ない

**(2) 分析項目の水準及びその判断理由**

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由) 教育研究の対象となる領域が拡大した状況を踏まえ、薬学以外の学問領域から教員を積極的に採用し、広範な学問領域に対応できる教育体制が整備されたことから基本的組織の編成に関して改善されていると判断できる。また、教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制に関してても、FD関連の活動を進めると共にアンケート実施により学生から意見を求め授業改善への取り組みが積極的に行われていると思われる。

## 分析項目Ⅱ 教育内容

### (1) 観点ごとの分析

#### 観点 教育課程の編成

(観点に係る状況) 学部教育では、豊かな知性と格調高い人間性・倫理観に裏打ちされた態度を養うとともに、自然科学への深い興味を育み、人間の総合的健康の意義を考えさせることを基本に、薬学研究者・技術者あるいは薬剤師として将来活躍するために必要な基礎的知識を修得させ、それを応用出来る技術を身に付けさせることを目標とする。

平成18年度から新制度が施行され、4年制の薬科学科及び6年制の薬学科が併置された。これに伴い、それまでの総合薬学科のカリキュラムに反映されていたこうした教育の理念を鈍化させることなく一層深める新しいカリキュラムが編成されている。平成18年度以降の入学者の卒業必要単位数と科目配当表を薬科学科、薬学科ごとに表7-12に示す。

必修、指定、選択の科目設定が若干異なるがいずれの学科も3年次まではほぼ同様の科目が配当されている。1, 2年次は全学共通科目、学部専門科目とも講義中心の科目が主体であるが、演習形式で進める科目も盛り込まれている。創薬有機化学エクササイズ、創薬物理化学エクササイズ1および2の3科目は平成18年度から新たに設けられた演習科目である。また、薬学科のみに新たに指定科目として配当された演習科目として、医療薬学チュートリアル演習1および2、先端医療SGD演習1および2があり、少人数でのチュートリアル形式の演習が行われる。3年次にはいずれの学科でも薬学専門実習1~4が配当され、3年次の午後の時間帯は前・後期ともすべてこれらの実習に当てられる。これは薬学部設立当時から実施されている薬学部のカリキュラムの最も特徴的な点である。薬科学科の学生は4年次の前期から研究室に配属され、前期の午前中に講義課目が配当されているが、前期の午後および後期は終日特別実習を行う。一方、薬学科は4年次にも医療系の専門科目が講義と演習の科目として配当されている。医療薬剤学2(4年次後期)は演習科目、医療薬学ワークショップ(4年次前期~6年次後期)は、講義、演習、実習を組み合わせた科目であり、いずれも平成18年度から新たに設けられたものである。薬学科の5年次の6ヶ月は実務実習(事前学習、病院実習、薬局実習)に当てられる。薬学科の学生は4年次の後期から研究室に配属され、特別実習を行う。

表7 (平成19年度学生便覧・シラバスより)

(薬科学科：4年制)

**平成18年度以降入学者の  
卒業に必要な科目数及び単位数**

区分		修得すべき単位数（卒業必要単位数）		計	
全 学 共 通 科 目	A群 (人文・社会科学系)	選択科目	20 単位以上	20 単位以上	
	B群 (自然科学系科目)	必修科目	10 単位		
		選択必修科目	12 単位以上	26 単位以上	
		選択科目(必修科目及び選択必修科目以外の科目)	4 単位以上		
全 学 共 通 科 目	C群 (外国語科目)	第1外国語 (英語) 必修科目 選択科目	8 単位以上 (2 単位) (6 単位以上)	12 单位以上	
		第2外国語 (英語以外の1外国語) 選択科目	4 单位以上 (4 单位以上)		
		計	58 単位以上		
学 部 科 目	講 義	必修科目	20 科目	60 単位以上	
		選択科目 32科目から	10 科目		
	実 習	実習科目	4 科目	22 単位以上	
		特別実習	1 科目		
合 計			82 単位以上		
合 計			140 単位以上		

- 注1) 全学共通科目及び学部科目の必修科目、選択必修科目及び選択科目等の各授業科目については、それぞれ別に定める。
- 2) 全学共通科目B群の選択必修科目の卒業必要単位数12単位を超えて修得したときの単位数は、同群選択科目の卒業必要単位数に算入する。

表8 (平成19年度学生便覧・シラバスより)

(薬科学科 : 4年制)  
**平成18年度以降入学者の  
全学共通科目の卒業必要単位数 (科目数)**

群	授業科目、必修・選択必修科目の別、単位数その他			
A群	(人文・社会科学系科目) 20単位以上			
B群	(自然科学系科目) 26単位以上			
区分	科目名	単位数	備考	
必修科目	薬学倫理・概論*	2	薬学部開講科目	
	薬学生物学	2	同上	
	薬学物理化学(化学熱力学)	2	同上	
	基礎有機化学A	2	同上	
	基礎有機化学B	2	同上	
選択必修科目	数学基礎A	4		
	数学基礎B	4		
	線形代数学A	2		
	線形代数学B	2		
	物理学基礎論A	2		
	物理学基礎論B	2		
	熱力学	2		
	物理学実験	2		
	基礎化学実験	2		
	生物学実習Ⅲ	2		
	数理統計	2		
	薬用植物学	2	薬学部開講科目	
	基礎情報処理1	2	同上	
選択科目	上記以外の科目			
C群	(外国語科目) 12単位以上			
第1外国語 英語 8単位以上				
必修科目 科学英語A・B(薬学部開講) 2単位				
選択科目 6単位以上				
第2外国語 英語以外の1外国語 4単位以上				
〔ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ロシア語、中国語、朝鮮語、アラビア語、日本語(留学生のみ)〕				

- 注 1) 新入生向け少人数セミナー(ポケット・ゼミ)は卒業に必要な単位数に算入する。ただし、A・C群として開講される科目については、C群の卒業単位として認定しない。
- 2) KUINEPは卒業に必要な単位数に算入する。ただし、B・C群科目については、C群の卒業単位として認定せず、B群としてのみ認定する。
- 3) A・D群またはB・D群科目を、D群科目として修得した場合は「増加単位」となる。
- 4) \*印は旧科目名「薬学概論」

表9(平成19年度学生便覧・シラバスより)

平成18年度以降入学者の薬学部開講科目配当表

(薬科学科: 4年制)

区分	授業科目名	単位	必修科目 選択科目 の別	配当年次							
				1年次		2年次		3年次		4年次	
				前	後	前	後	前	後	前	後
全学共通科目	薬学倫理・概論*	2	必修	2							
	薬学生物学	2	必修	2							
	薬学物理化学(化学熱力学)	2	必修		2						
	薬用植物学	2	選必			2					
	基礎有機化学A	2	必修	2							
	基礎有機化学B	2	必修		2						
	基礎情報処理1	2	選必	2							
	基礎情報処理2	2	選必	2							
	C群	科学英語A	1	必修		2					
		科学英語B	1	必修			2				
学部専門科目	有機化学1(有機合成化学)	2	必修			2					
	有機化学2(生物有機化学)	2	必修				2				
	有機化学3(創薬化学)	2	必修					2			
	有機化学4(精密合成化学)	2	必修						2		
	有機化学5(生体機能化学)	2	選択						2		
	天然物薬学1(天然物化学)	2	選択			2					
	天然物薬学2(薬用資源学)	2	必修				2				
	天然物薬学3(生薬学)	2	選択					2			
	医薬品化学・新薬論	2	選択						2		
	創薬有機化学エクササイズ	2	選択			2					
生物系	物理化学1(量子化学)	2	必修			2					
	物理化学2(電気化学・界面化学)	2	必修			2					
	物理化学3(構造化学)	2	選択				2				
	物理化学4(生物物理化学)	2	選択					2			
	物理化学5(生物構造情報学)	2	選択						2		
	分析化学1(薬品分析化学)	2	必修		2						
	分析化学2(放射化学)	2	必修			2					
	分析化学3(分光学)	2	必修			2					
	分析化学4(臨床化学)	2	選択					2			
	創薬物理化学エクササイズ1	2	選択		2						
	創薬物理化学エクササイズ2	2	選択			2					

表9の続き(平成19年度学生便覧・シラバスより)

(薬科学科: 4年制)

平成18年度以降入学者の薬学部開講科目配当表

区 分	授 業 科 目 名	単位	必修科目 指定科目 選択科目 の別	配 当 年 次							
				1年次		2年次		3年次		4年次	
				前	後	前	後	前	後	前	後
学部専門科目	生理学1(解剖生理学)	2	選択		2						
	生理学2(分子生理学)	2	必修			2					
	生理学3(病態生理学)	2	必修				2				
	生理学4(病態ゲノム学)	2	選択					2			
	薬理学1(総論・末梢薬理)	2	必修				2				
	薬理学2(循環器薬理)	2	選択					2			
	薬理学3(中枢神経薬理)	2	選択						2		
	薬物治療学1	2	選択							2	
	薬物治療学2	2	選択								2
	薬剤学1(溶液製剤論)	2	必修			2					
	薬剤学2(固形製剤論)	2	選択					2			
	薬剤学3(薬物動態学)	2	必修						2		
	医療薬剤学1	2	選択							2	
	医療薬剤学2	2	選択								2
	薬局方・薬事関連法規	2	選択								2
情報系	バイオサイエンス統計基礎	2	選択			2					
	基礎バイオインフォマティクス	2	選択							2	
	応用バイオインフォマティクス	2	選択								2
専門実習	薬学専門実習1	4	必修					○			
	薬学専門実習2	4	必修					○			
	薬学専門実習3	4	必修						○		
	薬学専門実習4	4	必修					○			
	特別実習	6	必修							○	○

注 1) 「配当年次」欄に掲げた数字は、講義科目の15週の毎週授業時数である。

2) 「配当年次」欄の「○」は、実習科目の配当年次である。

3) 「臨床薬学総論」「医療実務事前学修」は集中講義で行う。

4) \*印は旧科目名「薬学概論」

表10（平成19年度学生便覧・シラバスより）

(薬学科：6年制)

**平成18年度以降入学者の  
卒業に必要な科目数及び単位数**

区分		修得すべき単位数（卒業必要単位数）		計
全 学 共 通 科 目	A群（人文・社会科学系科目）	選択科目	20単位以上	20単位以上
	B群 (自然科学系科目)	必修科目	10単位	26単位以上
		選択必修科目	12単位以上	
		選択科目（必修科目及び選択必修科目以外の科目）	4単位以上	
	C群 (外国語科目)	第1外国語（英語） 必修科目 選択科目	8単位以上 (2単位) (6単位以上)	12単位以上
		第2外国語（英語以外の1外国語） 選択科目	4単位以上 (4単位以上)	
		計	58単位以上	
学 部 科 目	講義	必修科目	24科目	48単位
		指定科目	21科目から	30単位以上
		選択科目	16科目から	12単位以上
	実習	実習科目	4科目	16単位
		実務実習	2科目	20単位
		特別実習	1科目	10単位
	計			136単位以上
	合	計		194単位以上

- 注1) 全学共通科目及び学部科目の必修科目、選択必修科目、指定科目及び選択科目等の各授業科目については、それぞれ別に定める。
- 2) 全学共通科目B群の選択必修科目の卒業必要単位数12単位を超えて修得したときの単位数は、同群選択科目の卒業必要単位数に算入する。

表11 (平成19年度学生便覧・シラバスより)

(薬学科：6年制)

**平成18年度以降入学者の  
全学共通科目の卒業必要単位数(科目数)**

群	授業科目、必修・選択必修科目の別、単位数その他			
A群	(人文・社会科学系科目) 20単位以上			
B群	(自然科学系科目) 26単位以上			
区分	科目名	単位数	備考	
必修科目	薬学倫理・概論*	2	薬学部開講科目	
	薬学生物学	2	同上	
	薬物理学化学(化学熱力学)	2	同上	
	基礎有機化学A	2	同上	
	基礎有機化学B	2	同上	
選択必修科目	数学基礎A	4		
	数学基礎B	4		
	線形代数学A	2		
	線形代数学B	2		
	物理学基礎論A	2		
	物理学基礎論B	2		
	熱力学	2		
	物理学実験	2		
	基礎化学実験	2		
	生物学実習III	2		
	数理統計	2		
	薬用植物学	2	薬学部開講科目	
	基礎情報処理1	2	同上	
	基礎情報処理2	2	同上	
選択科目	上記以外の科目			
C群	(外国語科目) 12単位以上			
	第1外国語 英語 8単位以上			
	必修科目	科学英語A・B(薬学部開講)	2単位	
	選択科目		6単位以上	
	第2外国語 英語以外の1外国語 4単位以上 [ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ロシア語、中国語、朝鮮語、アラビア語、日本語(留学生のみ)]			

- 注1) 新入生向け少人数セミナー(ポケット・ゼミ)は卒業に必要な単位数に算入する。ただし、A・C群として開講される科目については、C群の卒業単位として認定しない。
- 2) KUINEPは卒業に必要な単位数に算入する。  
ただし、B・C群科目については、C群の卒業単位として認定せず、B群としてのみ認定する。
- 3) A・D群またはB・D群科目を、D群科目として修得した場合は「増加単位」となる。
- 4) \*印は旧科目名「薬学概論」

表12 (平成19年度学生便覧・シラバスより)

(薬学科: 6年制)

## 平成18年度以降入学者の薬学部開講科目配当表

区分		授業科目名	単位	必修科目 指定科目 選択科目 の別	配当年次									
					1年次		2年次		3年次		4年次		5年次	
					前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
全学共通科目	B群	薬学倫理・概論*	2	必修	2									
		薬学生物学	2	必修	2									
		薬学物理化学(化学熱力学)	2	必修		2								
		薬用植物学	2	選必			2							
		基礎有機化学A	2	必修	2									
		基礎有機化学B	2	必修		2								
		基礎情報処理1	2	選必	2									
	C群	基礎情報処理2	2	選必	2									
		科学英語A	1	必修			2							
		科学英語B	1	必修				2						
学部専門科目	化学系	有機化学1(有機合成化学)	2	必修			2							
		有機化学2(生物有機化学)	2	必修				2						
		有機化学3(創薬化学)	2	指定					2					
		有機化学4(精密合成化学)	2	指定						2				
		有機化学5(生体機能化学)	2	選択						2				
		天然物薬学1(天然物化学)	2	選択			2							
		天然物薬学2(薬用資源学)	2	指定				2						
		天然物薬学3(生薬学)	2	選択					2					
		医薬品化学・新薬論	2	選択						2				
	物理系	創薬有機化学エクササイズ	2	選択			2							
		物理化学1(量子化学)	2	必修			2							
		物理化学2(電気化学・界面化学)	2	必修			2							
		物理化学3(構造化学)	2	選択				2						
		物理化学4(生物物理化学)	2	選択					2					
		物理化学5(生物構造情報学)	2	選択						2				
	生物学系	分析化学1(薬品分析化学)	2	必修			2							
		分析化学2(放射化学)	2	必修				2						
		分析化学3(分光学)	2	選択				2						
		分析化学4(臨床化学)	2	指定					2					
		創薬物理化学エクササイズ1	2	選択			2							
		創薬物理化学エクササイズ2	2	選択				2						

表12 続き（平成19年度学生便覧・シラバスより）

(薬学科: 6年制)

平成18年度以降入学者の薬学部開講科目配当表

区 分	授 業 科 目 名	単位	必修科目 指定科目 選択科目 の別	配 当 年 次									
				1年次		2年次		3年次		4年次		5年次	
				前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
医療系	生理学1(解剖生理学)	2	必修		2								
	生理学2(分子生理学)	2	必修			2							
	生理学3(病態生理学)	2	必修				2						
	生理学4(病態ゲノム学)	2	指定					2					
	薬理学1(総論・末梢薬理)	2	必修					2					
	薬理学2(循環器薬理)	2	必修					2					
	薬理学3(中枢神経薬理)	2	必修						2				
	薬物治療学1	2	指定							2			
	薬物治療学2	2	指定								2		
	薬剤学1(溶液製剤論)	2	必修				2						
	薬剤学2(固形製剤論)	2	必修					2					
	薬剤学3(薬物動態学)	2	必修						2				
	医療薬剤学1	2	必修							2			
	医療薬剤学2	2	指定								2		
	薬局方・薬事関連法規	2	必修								2		
	医療薬学ワークショップ	2	指定							○	○	○	○
	医療薬学実験技術	2	指定							○	○	○	○
	学術情報論	2	指定							○	○	○	○
	医療実務事前学習	2	必修								○		
	臨床薬学総論	2	必修										○
情報系	医療薬学チュートリアル演習1	1	指定		2								
	医療薬学チュートリアル演習2	1	指定			2							
	先端医療SGD演習1	2	指定			2							
専門 実習	先端医療SGD演習2	2	指定			2							
	バイオサイエンス統計基礎	2	選択			2							
	基礎バイオインフォマティクス	2	指定							2			
	応用バイオインフォマティクス	2	選択							2			
	薬学専門実習1	4	必修					○					
	薬学専門実習2	4	必修					○					
	薬学専門実習3	4	必修						○				
	薬学専門実習4	4	必修					○					
	病院実務実習	10	必修								○		
	薬局実務実習	10	必修									○	
	特別実習	10	必修							○	○	○	○

注 1) 「配当年次」欄に掲げた数字は、講義科目の15週の毎週授業時数である。

2) 「配当年次」欄の「○」は、実習科目の配当年次である。

3) 「臨床薬学総論」「医療実務事前学修」は集中講義で行う。

4) \*印は旧科目名「薬学概論」

### 観点 学生や社会からの要請への対応

(観点に係る状況) 薬学に関する学問領域の多様化、グローバル化などを背景に、よりレベルの高い創薬研究者や薬剤師の養成が社会から望まれており、学生からも同様のことが学部教育に求められている。創薬研究者養成のためには、学部卒業後大学院における高度な教育・研究が必須であるが、ほとんどの学生が大学院に進学していることからも、こうしたニーズに十分対応していると考えられる。また、薬剤師養成に関しても実務実習の充実や薬剤師国家試験のための様々な対策を施してきており、特に平成18年度以降入学の薬学科の学生に対してはさらに改善された対応がなされる予定である。

表13および表14に、平成13年度以降の薬学部学生の他学部科目の聴講状況および薬学部講義科目に対する他学部・研究科からの聴講状況を示した。少数ではあるが、学生は他学部の科目を受講した実績がある。単位互換に関しては、卒業判定のための単位には含まれないものの、他学部科目を履修し、修得した単位は認定されることになっている。また、科目等履修生に関しては、平成16年度-1名2単位、平成17年度-1名2単位、平成18年度-1名4単位の実績がある。

学部学生が海外留学するための交流協定は、ソウル大学(平成15年10月) 南カリフォルニア大学(平成16年2月) の2校と薬学研究科との間に結ばれている。現在までにこの協定に基づいて留学した学生はないが、平成17年9月から18年6月の期間、スウェーデンウプサラ大学へ、京都大学の協定に基づいて薬学部生が留学している。また、平成17年に1件(1年間、イギリス)、平成18年に1件(半年、アメリカ)個別に学生が留学をしている。

表13 学部学生の他学部科目の聴講状況

(京都大学大学院薬学研究科・薬学部の現状と課題 自己点検・評価報告書(平成18年1月)より)

※ 各欄の数は、届出人数(単位数)を示す。

区分	文	教	法	経	理	医	工	農	総人	計
平成19年度前期・通年							1(4)		1(4)	
〃 後期										
平成18年度前期・通年	1(4)								1(4)	
〃 後期										
平成17年度前期・通年										
〃 後期										
平成16年度前期・通年										
〃 後期										
平成15年度前期・通年										
〃 後期										
平成14年度前期・通年					1(2)	2(10)			3(12)	
〃 後期										
平成13年度前期・通年					1(4)		2(10)			
〃 後期							2(14)	1(8)	1(2)	4(24)

表14 学部講義科目に対する他学部・研究科からの聴講状況

(京都大学大学院薬学研究科・薬学部の現状と課題 自己点検・評価報告書(平成18年1月)より)

※ 各欄の数は、届出人数(単位数)を示す。

区分	文	教	法	経	理	医	工	農	総人	計
平成19年度前期・通年										
〃 後期										
平成18年度前期・通年				1(2)	1(2)				1(2)	3(6)
〃 後期										
平成17年度前期・通年					1(2)			1(2)	2(4)	4(8)
〃 後期										
平成16年度前期・通年					1(4)					1(4)
〃 後期					1(2)		1(4)	2(4)	2(4)	6(14)
平成15年度前期・通年					1(14)					1(14)
〃 後期					1(22)				1(6)	2(28)
平成14年度前期・通年					2(20)					2(20)
〃 後期					1(20)					1(20)
平成13年度前期・通年							2(4)	1(18)		3(22)
〃 後期							2(4)	1(16)		3(20)

## (2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由) これまでの薬学部における教育理念がより明確に反映された新たなカリキュラムが平成18年度に編成され、講義、演習、実習がバランスよく盛り込まれている充実した内容と考えられる。特に、医療人としての薬剤師資格を基盤とする、医療、研究、教育従事者の養成を目的とする6年制の薬学科では、少人数での演習等、医療人としての素養を育むためのユニークな科目が用意されている。また、より高度な創薬研究者や薬剤師の養成といった学生や社会のニーズに対応できていると判断できる。

## 分析項目Ⅲ 教育方法

### (1) 観点ごとの分析

#### 観点 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

(観点に係る状況)

##### ① 教育課程の内容・構成等

現在の教育課程の内容と構成に関しては、観点2-1において表7-13に示したとおりである。1, 2年次は講義中心であるが、3つのエクササイズをはじめ演習形式の授業も組み合わせられている。薬学科には、医療に関する4つの演習科目が1, 2年次に配当され、医療人として備えておくべきコミュニケーション能力を低学年より涵養できるよう工夫されている。3年次にはいずれの学科でも実習が大きな比重を占めており、薬学科は4年次前期から、薬学科は4年次後期から特別実習を行う。薬学科には講義、演習、実習を組み合わせた医療薬学ワークショップも行われ、指導法を組み合わせた授業が盛り込まれている。

##### ② TAの採用状況

表15にTAの採用者数の一覧表を示した。各分野担当の講義、演習、実習にこれらのTAが活用されている。

表15 テーチング・アシスタント採用者一覧表

(京都大学大学院薬学研究科・薬学部の現状と課題 自己点検・評価報告書(平成18年1月)より)

	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
修士	113	123	128	115	152	144	139	140	157
博士	52	64	69	65	94	43	31	40	31
合計	165	187	197	180	246	187	170	180	188

#### 観点 主体的な学習を促す取組

(観点に係る状況) 4年次に行われる特別実習においては、学生自身が独自の研究テーマのもと、作業仮説の設定、実験計画の立案と実行など主体的な学習を行うよう十分配慮がされてきた。新カリキュラムにおいてもこの特徴は継続されている。

さらに、平成18年度から新たに自主的な学習を促すこと目的に、薬学科及び薬学科を対象に創薬有機化学エクササイズ、創薬物理化学エクササイズ1および2の3科目(各科目15コマ)を新たに設けた。また、薬学科には新たに医療薬学チュートリアル演習1および2、先端医療SGD演習1および2の4科目(各科目15コマ)を指定科目として新設した。特に薬学科の科目においては、少人数でのチュートリアル形式の演習が行われ、少人数討論において、学生が自ら司会、記録、発表を担当することで学生主体の学習が行われている。また、与えた課題に関し授業時間以外にインターネット等で学習・発表させ、評価する方式を取り入れるなど、単位の実質化に対しても配慮されている。

### (2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由) 各学科における人材養成の目標を達成できるよう講義、演習、実習がバランスよく組み合わされており、学生の主体的な学習を促す配慮がされている。すなわち、創薬研究者養成を目指す薬学科では、演習科目を新たに設けて研究者になるために必要な資質を習得させるように工夫されている。また薬剤師養成に焦点を当てた薬学科でも、チュートリアル形式の演習等を組み合わせて医療人に求められる知識、技能、態度を身につけるよう指導法が工夫されている。さらに、効率よく自主的な学習が行うことができる特別実習が行われている。

## 分析項目IV 学業の成果

## (1) 観点ごとの分析

## 観点 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

## ① 進級・卒業状況

大部分の学生は所定の学年時に必要単位を取得し、進級、卒業している（表2）。平成13年度～19年度の修業年限超過在籍数は、8名～16名であり在籍者数の2.2%～4.6%である。表16に平成13年度～19年度の卒業者の進路を示す。薬学部卒業生のほとんどが大学院に進学し、進学率は82.1%～91.1%である。

## ② 資格取得状況

薬学系大学あるいは薬学部卒業者は薬剤師国家試験の受験資格をもつ、すなわち薬剤師になることが社会的に要請されている。本学部でも薬剤師としての職能の基礎に関する学部教育には以前から十全の配慮をほどこしてきた。一方、薬剤師国家試験受験の準備は各学生の自主性に任せてきたが、平成9年の2学科統合以降は学生にその準備・対策を積極的に行うよう強く注意を喚起してきた。特に平成12年から開講の「薬学専門実習V」において、薬剤師職能に対する学生の理解が深まり、平成13年度には新卒業学生の合格率にその効果が顕著に現れた（表17）。その後は75%以上の水準を維持している。尚、平成18年度はやや低い合格率に留まったが、これは主に基盤科目的学力低下によるものと分析された。対策として補講を増やすと共に受験勉強に関する指導を行った結果、平成19年度の合格率は78.2%に上昇した。

表16 卒業者・修了者の進路

(京都大学大学院薬学研究科・薬学部の現状と課題 自己点検・評価報告書(平成18年1月)より)

卒業年度	学部・大学院生の別	就職				就職した学生の割合	進学	進学率	その他	合計
		薬剤師	企画・医療情報	企業・研究開発	教育・研究機関					
平成18年度	学部	2 (2)		3 (1)		5.4%	83 (30)	89.2%	5 (1)	93 (34)
	修士	3 (2)		44 (24)	3	64.9%	25 (5)	32.5%	2 (1)	77 (32)
	博士	1		14	3	56.3%			14 (1)	32 (1)
平成17年度	学部	1		2 (1)		3.5%	71 (30)	83.5%	11 (3)	85 (34)
	修士	3 (2)		40 (22)	4 (1)	54.0%	33 (6)	37.9%	7 (3)	87 (34)
	博士	1	1 (1)	7	4 (1)	72.2%			5 (1)	18 (3)
平成16年度	学部	1		3 (2)		5.1%	71 (25)	91.0%	3 (1)	78 (28)
	修士	3 (1)		42 (29)		58.4%	26 (3)	33.8%	6 (3)	77 (36)
	博士	1		17 (3)	4 (3)	68.8%			10 (2)	32 (8)
平成15年度	学部			3 (3)		3.8%	71 (23)	88.8%	6 (2)	80 (28)
	修士	6 (2)		42 (23)		63.2%	26	34.2%	2 (2)	76 (27)
	博士			5 (2)	5 (1)	45.5%			12 (3)	22 (6)
平成14年度	学部	1 (1)		1		2.2%	82 (38)	91.1%	6 (1)	90 (40)
	修士	2 (2)		50 (27)		70.3%	17 (1)	23.0%	5 (2)	74 (32)
	博士			11 (1)	2	44.8%			16 (5)	29 (6)
平成13年度	学部	3 (1)		4 (2)		8.3%	69 (23)	82.1%	8 (3)	84 (29)
	修士	3		37 (20)	1	52.6%	35 (8)	44.9%	2 (2)	78 (30)
	博士			16	2 (1)	66.7%			9 (3)	27 (4)

※( )内の数は女子学生で内数

**表17 薬剤師国家試験新卒者合格率**

(京都大学大学院薬学研究科・薬学部の現状と課題 自己点検・評価報告書(平成18年1月)より)

区分年度	受験者数	合格者数	合格率(%)
平成18年度	85	57	67.06
平成17年度	83	63	75.9
平成16年度	76	60	78.95
平成15年度	75	59	78.67
平成14年度	80	62	77.5
平成13年度	73	62	84.93
平成12年度	85	54	63.53
平成11年度	69	42	60.87
平成10年度	72	52	72.22

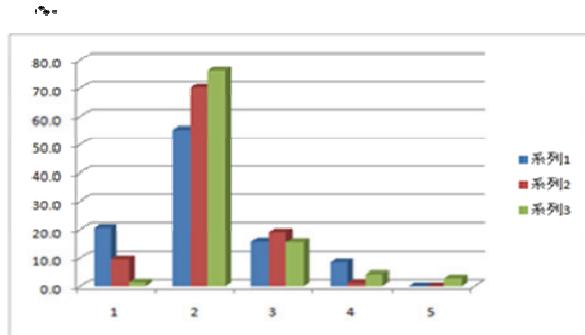
**観点 学業の成果に関する学生の評価**

(観点に係る状況)

図3に平成18年度の学部学生(2~4回生)に学業の成果に関して意見聴取を行った結果を示す。知的充足感に関しては、良い評価をする学生が多く、学生は概ね満足しているものと考えられる。また、理解度についても比較的よい評価をしており、もっと勉強したいことが出てくると回答した学生の割合も高く、学生は学業の成果に概ね満足しているものと思われる。

**図3. 学部学生アンケート結果その2 (平成17~19年度 学生授業評価アンケート調査より)****知的充足感**

1. 大学の授業は自分の興味や関心、知的欲求に応えてくれる

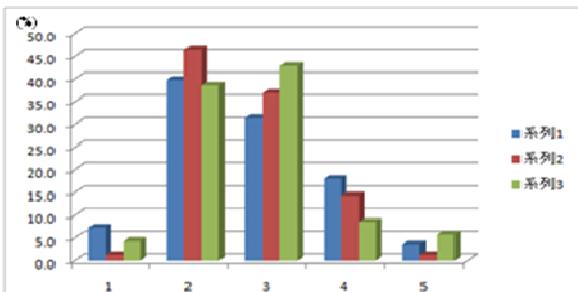


系列1：2回生 系列2：3回生 系列3：4回生

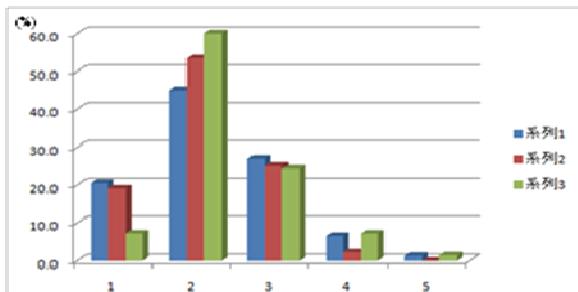
- ①とてもある
- ②ときどきある
- ③どちらともいえない
- ④ほとんどない
- ⑤全然ない

**教員と学生の関係**

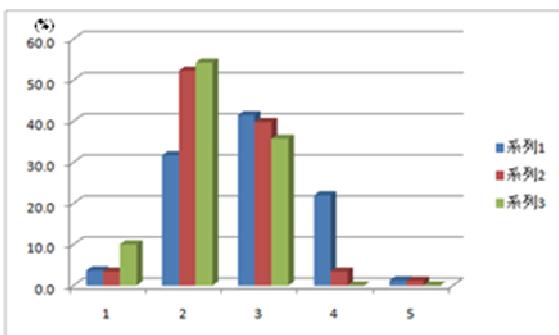
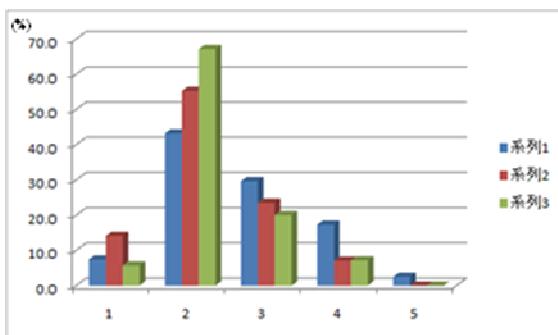
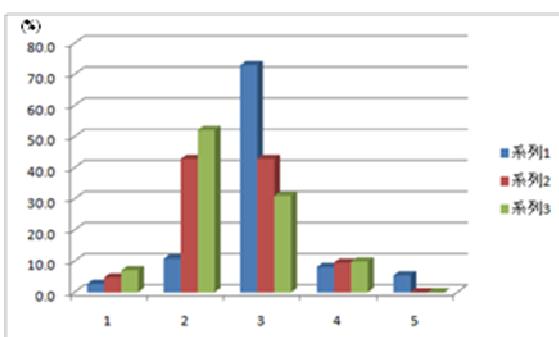
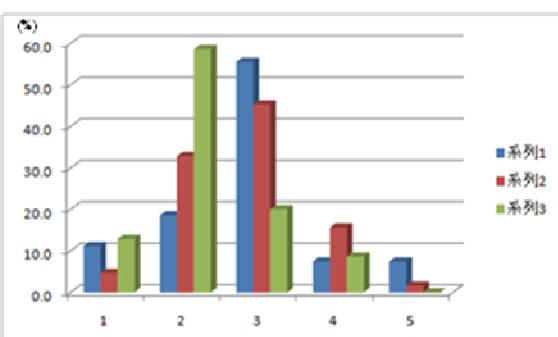
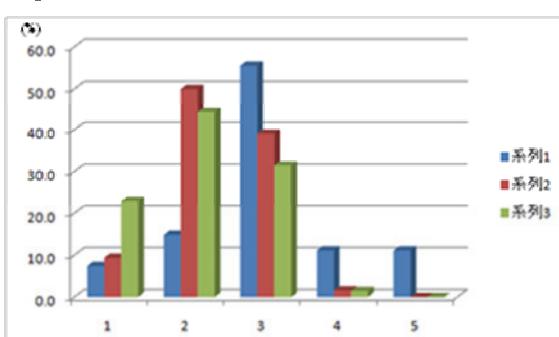
2. 教員の教育への熱意が感じられる



3. 教員の学問追求の熱意が感じられる



(図3 続き)

**理 解 度****4. 大学の授業の内容は理解できる****5. 大学の授業を受けているともっと勉強したいことが出てくる****6. 特別実習で問題提示や問題解決能力を学ぶことが出来る****7. 先端研究について学ぶことが出来る****8. 大学院の教育・研究に対応する準備が出来る**

系列1：2回生 系列2：3回生 系列3：4回生

- ①とてもある ②ときどきある  
 ③どちらともいえない ④ほとんどない  
 ⑤全然ない

**(2) 分析項目の水準及びその判断理由**

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由) 修業年限を超過する学生は少なく、ほぼ全員の学生が進級、卒業し、大学院に進学しており、十分な学力を身につけたものと考えられる。学生による評価からも学業成果に対して満足していると判断できる。

## 分析項目V 進路・就職の状況

### (1) 観点ごとの分析

#### 観点 卒業(修了)後の進路の状況

##### (観点に係る状況)

平成13年度～19年度に薬学部を卒業した学生の大部分は大学院に進学し、就職率は、2.2%～8.4%と低い割合である（表16）。企業の研究開発部門や薬剤師として医療機関に就職している。

#### 観点 関係者からの評価

##### (観点に係る状況)

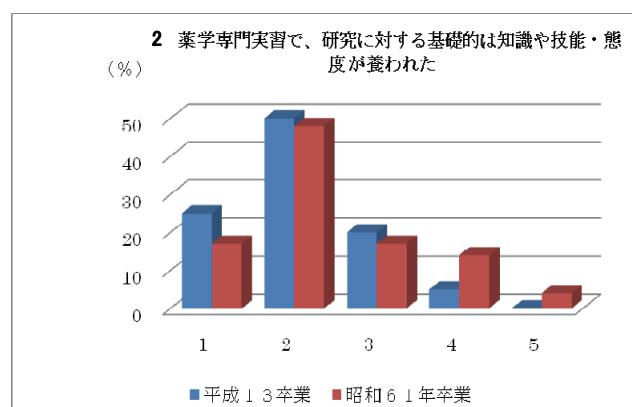
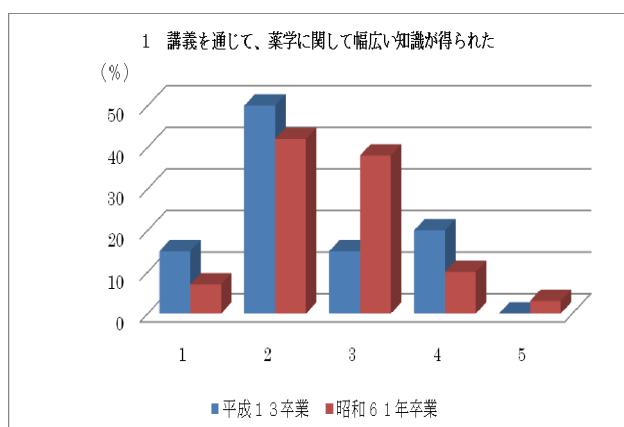
図4に、昭和63年及び平成15年に修士課程を修了した学生に学部で受けた教育に関する意見聴取を行った結果を示す。講義及び実習の満足度に関しては、良い評価をする学生の割合が高かった。人脈形成や人間形成についても比較的よい評価をしており、修了生は学部で受けた教育に概ね満足しているものと思われる。また、現在の仕事に学んだ知識が役立っていると回答した者は55%（昭和63年）及び63%（平成15年）と多かった。

### (2) 分析項目の水準及びその判断理由

#### (水準) 期待される水準を上回る

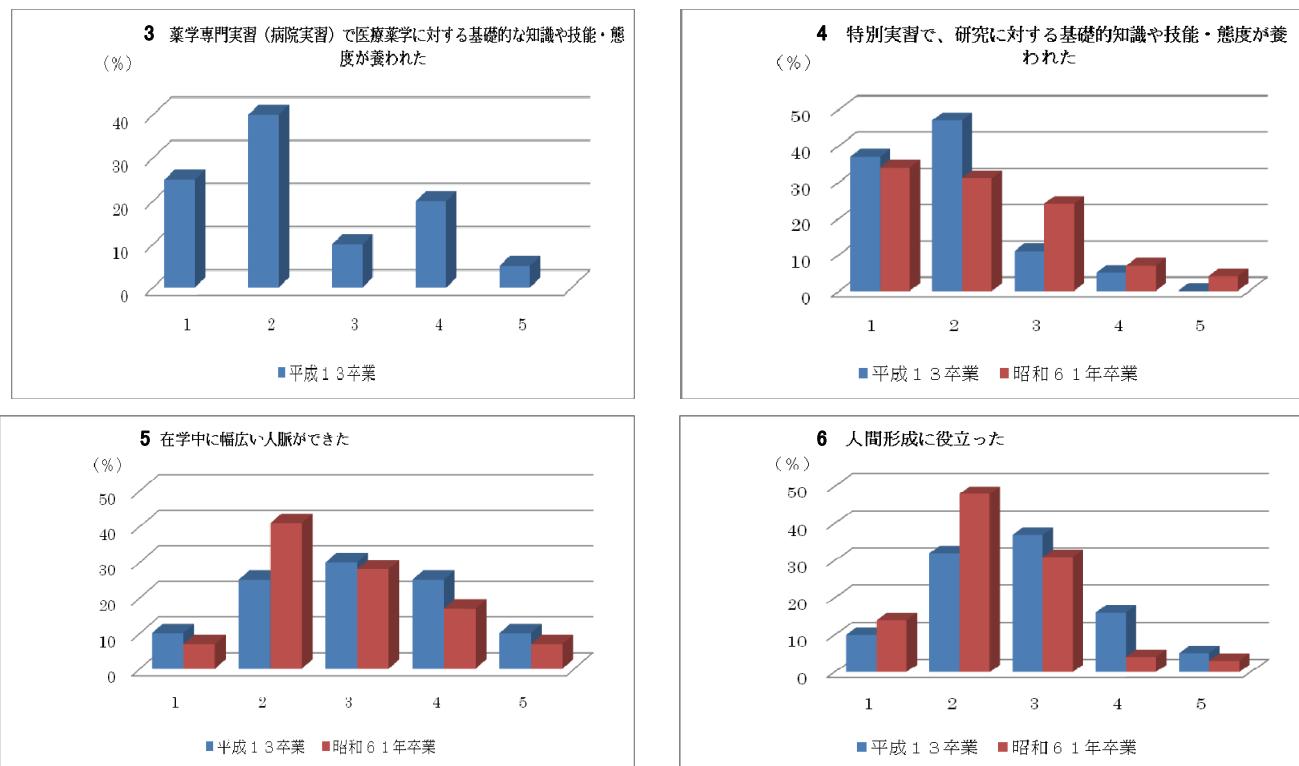
(判断理由) 学部卒業生の大部分は大学院に進学し、その後企業の研究開発部門や医療機関に就職しているが、アンケート調査の結果、多くの学生が在学中に受けた学部教育に満足していると判断できる。

図4(平成19年度修了生アンケート調査より)



①高い満足度 ②やや高い満足度 ③どちらでもない ④やや低い満足度 ⑤低い満足度

(図4 続き)



①高い満足度 ②やや高い満足度 ③どちらでもない ④やや低い満足度 ⑤低い満足度

### III 質の向上度の判断

#### ①事例1 「組織編成の改善」（分析項目I 基本的組織の編成）

(質の向上があったと判断する取組) 教育研究領域の多様化への対応策として、広く定員削減が進行中の状況にも関わらず、平成19年度には定員増加を実現し、新しい専攻を設置したこと、また同時に薬学領域以外の学問領域の常勤教員を新たに採用したことなど組織編成上の改善を達成したことは評価に値する。また、平成18年度に統合薬学フロンティア教育センターが新設されたこと、また文部科学省より6年制教育支援のための「地域医療等社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成推進プログラム」(医療人GP)の助成を受け、同センター内に改革推進教授、改革推進助教の2名の教官を新たに配置できたことからも、組織編成において十分な質の向上があったと判断できる。

#### ②事例2 「6年制カリキュラムの整備」（分析項目II 教育課程の編成）

(質の向上があったと判断する取組) 従来のカリキュラムも、薬学研究に対する知的好奇心および薬剤師職能の基礎となる臨床薬学知識、職業倫理の涵養を通じて、研究者、医療人として求められる学生の基本的素養の向上を図るという薬学部の教育理念に基づいたものであった。平成18年度から新制度が施行され、これまで薬学部が掲げてきた学部教育の理念、目標がより一層明確化された。これを受けたて新たに編成されたカリキュラムは、講義、演習、実習がバランスよく盛り込まれている充実したものとなっている。特に、医療人としての薬剤師資格を基盤とする、医療、研究、教育従事者の養成を目的とする6年制の薬学科のカリキュラムは、医療人GPプログラムと連関させる形で目的を達成するための十分な配慮がされている。

#### ③例3 「授業形態の組合せによるカリキュラムの改善」（分析項目III 授業形態の組合せと学習指導法の工夫）

(質の向上があったと判断する取組) 従来の薬学部の授業の大きな特徴の一つとして3年次に行われる薬学専門実習Ⅰ～Ⅳと4年次の薬学専門実習Ⅴ(病院実習)があげられ、これら実習科目の履修を通じて、将来研究者および薬剤師として活躍するための基本的な知識、技能、態度を養成してきたことがあげられる。新カリキュラムでは、こうした特徴を保持しつつ新しい演習科目を補充することにより、創薬研究者養成を目指す薬学科では研究者になるために必要な資質を習得させるように、また薬剤師養成に焦点を当てた薬学科では医療人に求められる知識、技能、態度を身につけさせるように、各学科の目指す目標を実現するためにより一層講義、演習、実習がバランスよく組み合わされた形で指導が行われるようになった。これにより、学生がより効果的、主体的な学習を進めることが可能になり、十分な質の向上があったと考えられる。